

おかあさんの唐揚げ

脚本 CineOps

第一稿

(これはサンプル脚本です)

登場人物

今野ミチコ (63) ..... 定食屋「ひまわり食堂」の女将  
今野ケンジ (34) ..... ミチコの長男／東京で会社員  
今野ユウ子 (33) ..... ケンジの妻／妊娠七ヶ月  
佐々木 (72) ..... ひまわり食堂の常連／元酒屋  
木下 (45) ..... ひまわり食堂の常連／町工場社長  
真琴 (19) ..... 近所の学生／アルバイト志望  
渡部医師 (50) ..... 市立病院・内科  
看護師・三浦 (28) ..... 市立病院  
亡き父・今野ケンジ (故人／回想) ..... 先代店主  
幼少ケンジ (7) ..... 回想  
若きミチコ (25) ..... 回想

場所 (ロケ地)

ひまわり食堂 (外観・店内・厨房・二階住居)  
東京・ケンジの自宅マンション  
東京駅／地方駅ホーム  
市立病院 (廊下・診察室・病室)  
商店街

○ 1 ひまわり食堂・外観 (朝)

下町の路地裏。

古びた木造二階建ての定食屋「ひまわり食堂」。

色あせた緑の暖簾がまだ出ていない。

入り口のガラス戸に、手書きの張り紙。

「四月末日をもって閉店いたします ひまわり食堂」

通りかかった主婦が足を止め、眉をひそめる。

隣の乾物屋のオヤジが出てきて、張り紙を指差し何か話す。

商店街のスピーカーから古いラジオ体操の音楽。

## ○ 2 ひまわり食堂・厨房（朝）

白いタイル張りの厨房。磨き込まれたステンレス台。

壁のカレンダーは四月。赤丸が月末の日付を囲む。

割烹着姿のミチコ（63）、手際よくキャベツを千切りにしている。

額にうっすら汗。

コンロの上では寸胴鍋で出汁がとれている。

ミチコ「（ひとり言で）……今日も……ちゃんとやらな……」

包丁の音、とんとんとん。

途中で手を止め、胸をおさえる。

一瞬、顔をしかめる。が、すぐに深呼吸をして作業を再開する。

カウンターの端に、一枚の古い写真立て。

若き日のミチコ（25）と夫・先代ケンジ（30代）、

幼いケンジ（7）を抱いて店の前で笑っている。

○3 ケンジのマンション・寝室（朝）

東京都内、築浅のマンション。

ブラインド越しに朝の光。

ベッドサイドのスマートフォンが鳴る。

画面に「母」の表示。

ケンジ（34）、ワイシャツ姿のまま寝落ちしている。

ケンジ「（眠そうに）……はい、もしもし……」

ミチコの声（電話）「あんた、起きとった？」

ケンジ「（身を起こす）……おかん？ どうしたん、朝から」

ミチコの声「ちよつとな……相談したいことあってな」

ケンジ、隣で眠っているユウ子（33／大きなお腹）を見る。  
声を潜めて廊下に出る。

○4 マンション・リビング（朝）

ケンジ、スマホを耳に当てながら窓辺に立つ。

ケンジ「相談って、なんや。電話で言えんことか」

ミチコの声「……店な、畳もうかと思うとる」

ケンジ、絶句する。

ケンジ「……は？」

ミチコの声「ごめんな、突然で。連休中に一度、帰ってきてくれへんか」

電話、切れる。

ケンジ、スマホを握ったまま立ち尽くす。

窓の外、東京の空。飛行機雲がゆっくり伸びていく。

## ○5 ひまわり食堂・店内（昼）

カウンター五席、四人掛けテーブル三つ。

壁には色あせたメニュー板。筆文字で「唐揚げ定食 八百円」。

扉の鈴が鳴り、常連の佐々木（㉒）が入ってくる。

ハンチング帽、杖をついている。

佐々木「女将、いつもの」

ミチコ「はいよ」

佐々木、カウンター端の定位置に座る。

張り紙のことを切り出すか迷う様子。

佐々木「……あれ、ほんまなんか」

指で、入り口の張り紙の方を差す。

ミチコ「（手を止めず）……ええ、ほんまです」

佐々木「三十年やで。三十年、ここの唐揚げ食うてきたんやで」

ミチコ「（小さく頭を下げる）すんません……」

佐々木、黙って箸を取る。

○ 6 ひまわり食堂・厨房（昼）

ミチコ、唐揚げ用の鶏もも肉を一口大に切る。  
醤油、酒、生姜、にんにく。タレを揉み込む。

片栗粉をまぶし、油へ。

じゅわつ、と音がして湯気が立つ。

ミチコ、箸で具合を確かめる。

焦げ茶色に揚がった唐揚げを、新聞紙を敷いたバットへ。

カウンターの越しに、佐々木の背中が見える。

○ 7 地方駅ホーム（夕）

各駅停車が到着する。

ケンジ、ポストンバッグを肩に、ホームに降り立つ。

改札を抜けると、見慣れた商店街のアーケード。

駅前の花屋の前を通る。

一瞬立ち止まり、白い小さなブーケを買う。

○ 8 ひまわり食堂・外観（夕）

夕焼け。商店街はもう明かりが灯り始めている。

ケンジ、食堂の前に立つ。

入り口の張り紙を、しばらく無言で見つめる。

息を吸って、ガラス戸を開ける。

○ 9 ひまわり食堂・店内（夕）

鈴の音。

ミチコ、厨房から顔を出す。

ミチコ「(驚いて) ……ケンジ?」

ケンジ「ただいま」

数秒の沈黙。

ミチコ「早かったやんか……明日来るんかと思ってた」

ケンジ「仕事、早めに切り上げてきたんよ」

ケンジ、カウンターに花束を置く。

ケンジ「墓に供えよ思て」

ミチコ、花束を見てうなづく。

ミチコ「……お父さん、喜ぶわ」

ケンジ、ボストンバッグを上がり框に置く。

○10 ひまわり食堂・厨房(夕)

ミチコ、再び鶏もも肉を切り始める。

ケンジ、カウンターを挟んで座る。

ケンジ「おかん、体は?」

ミチコ「(わざと明るく) 元気や。まだまだ現役や」

ケンジ「……電話の声、疲れとったで」

ミチコ「気のせいやろ」

ミチコ、片栗粉をまぶす手を止めず話す。

ミチコ「ユウ子さん、お腹の具合は？」

ケンジ「順調。七ヶ月入った」

ミチコ「……そう」

油が温まってくる音。

ミチコ、鶏肉を入れる。じゅわっ。

○11 ひまわり食堂・店内（夜）

テーブルに唐揚げの大皿。千切りキャベツ、レモン、マヨネーズ。  
湯気の立つ白米と味噌汁。

ビール瓶が一本、コップが二つ。

ミチコ「まあ、飲み」

ケンジ「……おかんも飲むんか」

ミチコ「一杯だけな」

ケンジ、母のコップにビールを注ぐ。

ミチコ、ケンジのコップに注ぐ。

乾杯。

唐揚げを一つ、ケンジが口に運ぶ。

噛みしめる。目を閉じる。

ケンジ「……やっぱ、これやな」

ミチコ「(笑う) 子供の頃から変わらん」

○12 ひまわり食堂・店内(夜)

食事が進む。ビール瓶、空に近づく。

ケンジ「で……閉めるって、どういうことや」

ミチコ、箸を置く。

ミチコ「お父さんから継いで、三十五年や。もう、ええかな思てな」

ケンジ「ええかな、て……」

ミチコ「体もな、ちょっとしんどうなってきたんよ」

ケンジ「病気か」

ミチコ「(首を振る) 歳や」

沈黙。

ケンジ「店、どうするん」

ミチコ「取り壊して、更地にして、売るわ」

ケンジ「売る？」

ミチコ「二階も古いしな。雨漏りもするし」

ケンジ、ビールを飲み干す。

言葉を探すが、出てこない。



○13 ひまわり食堂・二階住居（夜）

六畳の和室。古い仏壇。

父・先代ケンジの遺影。穏やかに笑っている。

ケンジ、正座して仏壇に手を合わせる。

ケンジ「（心の声）親父、おかん、店畳む言うてる。どう思う？」

遺影、答えない。

ケンジ、ポストンバッグから封筒を出す。

中身は「住宅ローン契約書 東京都世田谷区」。

ケンジ「（心の声）……俺も、こっちで家買うたところやねん」

襖の向こうから、食器を洗う音。

○14 回想・ひまわり食堂・厨房（夜）

昭和の終わり。まだ新しい店。

若き日のミチコ（25）、割烹着で泣きそうな顔。

先代ケンジ（30代）、白い「シャツで唐揚げを揚げている。

先代「何回失敗してもええ。何回でもやればええねん」

若ミチコ「……もう、十個も揚げたで……」

先代「黒焦げは、肥やしや。次の一個のための」

幼いケンジ（7）がひよこつと顔を出す。

幼ケンジ「おかあさん、もう一個揚げて！」

若ミチコ、涙を拭いて笑う。

○15 ひまわり食堂・二階住居（深夜）

ケンジ、布団の中で天井を見つめている。

階下で、かすかに、なにかが落ちるような音。  
どん、と。

ケンジ、起き上がる。

○16 ひまわり食堂・厨房（深夜）

暗い厨房。

ミチコが床に崩れている。

ケンジ、駆け寄る。

ケンジ「おかん！ おかん！」

ミチコの手から、茶碗がこぼれ落ち、割れている。

ケンジ、震える手で救急車を呼ぶ。

ケンジ「（電話に）すみません、母が、倒れて……」

○17 市立病院・廊下（夜明け）

蛍光灯の白い廊下。

ケンジ、長椅子に座り、缶コーヒーを握っている。

スマホが鳴る。ユウ子から。

ケンジ「……おかんが倒れた。今、病院」

ユウ子の声「大丈夫なの？」

ケンジ「わからん。検査中や」

ユウ子の声「私もそっち行こうか」

ケンジ「(少し迷って) いや、お前は来んでええ。身体大事にしとき」

電話を切る。

廊下の自動販売機が、ぶううん、と鳴っている。

○18 市立病院・診察室(朝)

渡部医師(50)、モニターを指差しながら説明している。

渡部「心臓の弁が、少し弱ってますね。

今回ののは、過労と貧血が重なったものです」

ケンジ「命には、別状ないんですか」

渡部「無理をしなければ。

ただ、これまでと同じペースで働くのはお勧めしません」

ケンジ、頷きながら、じっとモニターを見ている。

渡部「お仕事、何をされてます？」

ケンジ「(一呼吸おいて) ……定食屋です」

渡部「じゃあ、ちょっと考え時ですね」

○19 市立病院・病室（昼）

四人部屋の窓際。

ミチコ、ベッドで点滴。

ケンジ、丸椅子に座っている。

ミチコ「ごめんな、迷惑かけて」

ケンジ「……ええよ」

ミチコ「店……もう、今月で閉めよ思う」

ケンジ「そんな急に決めんでも」

ミチコ「急やない。前から決めてた」

ケンジ「……」

ミチコ「お父さんと始めた店や。お父さんおらんって二十年、私一人で続けてきた。そろそろ、私も、休みたい」

ケンジ、何も言えない。

窓の外、桜の枝に葉が茂り始めている。

○20 ひまわり食堂・店内（昼）

誰もいない店内。

ケンジ、一人でカウンターの椅子に座っている。

壁のメニュー板。

「唐揚げ定食」「生姜焼き定食」「焼き魚定食」……

文字はすべて父の筆跡。

ケンジ、立ち上がり、厨房に入る。

○21 ひまわり食堂・厨房（夕）

ケンジ、エプロンをつけ、母の包丁を握る。  
鶏もも肉を切り始める。不格好。

タレを作る。分量を目分量で。

片栗粉をまぶす。

油に入れる。

じゅわつ。

数分後、引き上げた唐揚げは真っ黒。

ケンジ、ため息。

もう一度。

油の温度を確認せず投入。

今度はべちゃべちゃで火が通っていない。

ケンジ「……くそ」

三度目。

今度は焦がしすぎる。

店の入口で、鈴が鳴る。

○22 ひまわり食堂・店内／厨房（夕）

佐々木（T2）が入ってくる。

煙の匂いに顔をしかめる。

佐々木「女将……じゃないな、坊主か」

ケンジ「(慌てて) あ、あの、今日、店休みで」

佐々木「そやろな。女将、病院やろ」

佐々木、カウンターに座り、エプロン姿のケンジを見上げる。

佐々木「揚げてみたんか」

ケンジ「……全部、失敗した」

佐々木「そうか」

佐々木、立ち上がり、厨房に入る。

佐々木「ちょっと、貸せ」

ケンジ、言われるまま包丁とボウルを佐々木に渡す。

○23 回想・ひまわり食堂・厨房(夜／昭和)

若き日のミチコ(25)と先代ケンジ(30代)。

先代「コツはな、三つや」

若ミチコ「……三つ」

先代「一、肉はちゃんと部屋の温度にもどす。

二、衣は二回つける。

三、油は一七〇度から入れて、最後だけ一九〇度に上げる」

先代、実演する。

揚げたての唐揚げを一つ、ミチコに差し出す。

先代「食うてみ」

若ミチコ、熱さに顔を歪めながら齧る。  
目を丸くする。

若ミチコ「……おいしい」

先代「(笑う) あたりまえや。俺の弟子や」

○24 ひまわり食堂・厨房(夜)

佐々木、ケンジに指導している。

佐々木「肉は冷蔵庫から出して、十五分置いとけ。  
衣、まず薄力粉。そのあと片栗粉。二回な」

ケンジ「(メモを取る)」

佐々木「油は、まず一七〇。

揚げ上がり直前に一度引き上げる。  
一九〇に上げて、もう一度、三十秒」

ケンジ、手順通りに揚げる。  
じゅわっ。

引き上げる。

今度は、きつね色。

佐々木、一つつまんで齧る。

佐々木「……まあ、六十点やな」

ケンジ「合格ですか？」

佐々木「落第や。けど、道は見えた」

ケンジ、口元をゆるめる。

窓の外、満月。

○25 市立病院・病室（朝）

ミチコ、ベッドの上で朝食のトレイを前にしている。  
薄いおかゆ、味のない汁物。

ミチコ「（ぼやく）……味、うっすいなあ」

引き戸が開く。

ケンジ、タッパ―を抱えて入ってくる。

ケンジ「おかん」

ミチコ「ケンジ……どないしたん」

ケンジ、タッパ―を開ける。

湯気と共に、唐揚げの香ばしい匂い。

ミチコ、目を見開く。

ミチコ「あんた、揚げたん？」

ケンジ「一個、食うてみ」

ミチコ、箸で一個つまむ。

口に入れる。噛む。

ゆっくり、ゆっくり、目に涙が浮かぶ。



ミチコ「……お父さんの、味や」

ケンジ「（うなづく）佐々木のじいちゃんに教わった」

ミチコ「（笑う）あの人、ようやる」

ミチコ、二個目を頬張る。

病室の窓から、朝の光。

○26 ひまわり食堂・店内（昼）

暖簾が出ている。「営業中」の札。

店内、久々に人で賑わっている。

常連の木下（㊟）、作業服の若手、近所の主婦たち。

木下「女将、もう大丈夫なんか」

ミチコ「おかげさんで」

カウンター越しに、厨房で揚げ物をするケンジの背中。

木下「息子、戻ってきたん？」

ミチコ「（少し笑う）……お試し期間や」

客一同、笑う。

真琴（19／女子大生）が、おそるおそる入ってくる。

真琴「あの……張り紙取れたって聞いて……」

もしかして、バイト募集、まだありますか」

ミチコ「(驚く) あんた、前に面接来てた子やな」

真琴「はい」

ミチコ「ちょうど、募集するところやってん」

○27 ひまわり食堂・店内(夕)

客がひと段落した時間。

ケンジとミチコ、カウンターを挟んで座っている。

テーブルに、ケンジ作の唐揚げ定食。

ミチコが一口食べる。

ミチコ「……うん、今日のは七十点」

ケンジ「昨日より上がった」

ミチコ「(真面目な顔で) で、あんた、どうするん」

ケンジ「……」

ミチコ「東京に家買うたんやろ。ユウ子さんもおる。  
赤ちゃん生まれる」

ケンジ「おかん、知ってたんか」

ミチコ「封筒、見た。二階の仏間で」

沈黙。

ミチコ「無理せんでええんよ」

ケンジ「……無理やない。俺、継ぎたい」

ミチコ、手にしていたグラスを、カウンターに置こうとして、縁を欠いてしまう。からん、と軽い音。

二人、顔を見合わせる。

どちらからともなく、小さく笑う。

ミチコ「……お父さんに、聞いてみよか」

二人、仏間の方を見る。

○28 ひまわり食堂・二階住居（夜）

仏壇の前。

ケンジ、ミチコ、ユウ子（㉮／大きなお腹で東京から到着）。

父・先代の遺影。

線香の煙、ゆっくり立ち上る。

ケンジ「親父、俺、継ぐわ。」

ユウ子と二人で、こっちでやる」

ユウ子「お義父さん、よろしくお願いします」

ミチコ、目頭を押さえる。

おりんの音、澄んだ響き。

○29 ひまわり食堂・厨房（早朝）

翌日。夜明け前。

ミチコとケンジ、二人並んで仕込み。

ミチコが千切りキャベツ、ケンジが鶏肉の下処理。

ミチコ「包丁、まだ危なっかしいな」

ケンジ「苦笑」 厳しいな」

ミチコ「三十五年分、教えるからな。覚悟しとき」

コンロに火が入る。

ぼっ。

青い炎。

○30 ひまわり食堂・外観（朝）

暖簾がかかる。

入り口のガラス戸。

閉店の張り紙は、もうない。

代わりに、新しい貼り紙。

「本日より、親子二代でやっています ひまわり食堂」

朝の光が、古い木枠のガラス戸を照らす。

中から、包丁の音、油の弾ける音。

佐々木が杖をついて近づいてくる。

ガラス戸を開ける鈴の音。

佐々木の声（店内から）「女将、いつもの」

ミチコの声「はいよ」

ケンジの声「（少しかすれて）……はいよ」

